

紳士貴族
結婚事情
全集

19
1

M

027403-000-6

19-1

日耳曼国紳士貴族結婚事情

エス. バーリング. ゴールド/ 著

M21

ADJ-0174



No. 10616

日耳曼國
紳士貴嬢女
因事情全

英國 エス、パーリング、ゴールト氏 著
日本 加本隆太郎 譯



東京
19-1
文祥堂發兌

日耳曼國紳士貴嬢 婚姻事情序

婚姻アリテ後ニ家族出テ家族出テ、後ニ
社會生シ社會生シテ後ニ始メテ邦國ノ起
ル者ナレハ邦國ノ貧富強弱ハ社會組織ノ
良否ニ源シ社會組織ノ良否ハ家族制度ノ
善惡ニ由リ家族制度ノ善惡ハ則チ年少ナ
ル男女互ニ百年ノ双棲ヲ契ル始メニ當リ
テ行フ處ノ風俗習慣ノ正邪如何ニ關スル

ノ大ナルハ固ヨリ論ヲ待タサルナリ
果シテ然レハ男女婚姻ニ關スル風俗習慣
ノ善惡如何ハ其利害僅ニ一身一家ニ止マ
ラスシテ實ニ邦國貧富強弱ノ由テ生出ス
ル原因ナリト謂フモ敢テ不可ナカルヘシ
故ニ深ク其國盛衰ノ原因ヲ探求セント欲
スル者ハ何人モ之ヲ忽緒ニ附ス可ラサル
ヤ明ナリ且ツ我邦ノ如キ數百年來ノ弊風

陋習ヲ破壊シ正ニ新制度ヲ組織セントス
ルノ時ニ於テ他邦ノ沿革如何ヲ考照スル
ハ亦今日ノ一大要務ト謂ハサルヲ得ス
予友加本隆太郎君此書ヲ譯スルノ意モ亦
此處ニアル歟若シ夫レ譯文ノ善惡ハ予ハ
此處ニ贅辨ヲ費スヲ好マス書中ノ議論ニ
至リテハ假令ヒ二三ノ議ス可キ者ナキニ
非スト雖モ一度之ヲ世ニ公ニセハ其國家

ニ裨益アルハ蓋シ又鮮少ナラサルベシ依
テ需ニ應シ此言ヲ以テ序ト爲ス

明治廿一年五月

綾井武夫 識

日耳曼國
紳士貴族
婚姻事情

目次

- 第一章 婚姻ノ來歴
- 第二章 婚姻ト宗教ノ關係
- 第三章 婚姻ト宗教ノ關係(二)
- 第四章 自由撰擇婚姻ノ形狀
- 第五章 結論

日耳曼國婚姻事情

英國

エス、バーリントン、ゴールド氏著

日本

加本隆太郎譯述

第一章

世界各國風俗

婚姻ノ來歴

異ニシ習慣ヲ別ニシ種々ノ見ルベキ者甚
人ヲシテ奇異ノ想ヲ爲サシムルモノハ各國
婚姻法ニ及ブモノナシ東洋ノ婚姻ハ東洋ノ風アリ西洋ノ
婚姻ハ又西洋ノ俗アリ然レモ其最モ奇異人ヲシテ幾ント抱
腹絶倒セシモノハ蓋シ日耳曼婚姻法ニ如クモノナシ

世人若シ古代ノ日耳曼文學ヲ學ヒ而シテ後チゲヤオリ
ノ相撲ハ果シテ如何ナル者ナリシヲ知ラザルモノナシ今
田舎物語ヲ一讀セバ婚姻ノ居室ニ於テガンサーブランビルト

十九世期ニ於テモタイロル婦人ノ如ク昔シニベラシクセン
王ノ時ニ當リ女王カンサー婚室ニ臨ンテ働キタルカ如ク
激烈粗暴ノ搏撃ヲ爲サズシテ未ダ婚姻セシモノ非ザルナ
リ荷モ日耳曼ノ黒林ヲ漫遊シ婚儀ノ將ニ行ハレントスル
ノ村落ヲ徘徊セハ新郎新婦互ニ馬ニ跨リ鞭ヲ擧ゲテ相驅
逐スルノ有様ヲ實見スヘシ又其國古代ノ風儀ヲ知リタル
人々ハ昔シ婚ヲ結ブニ當テ新郎新婦ヲ生擒スルノ風習一
般ニ流行シタルヲ知ラン今日ニ至ルモ支那鞑靼人ノ中ニ
ハ往々鎗痕ヲ有スル新婦ハ其痕跡ヲ以テ得色自負ノ風ア
リト亦以テ古代ノ風習ヲ證スルニ足ラン然レモ「ス」ウ「ト」
チリト云フ一婦人アリ此野蠻ノ風習ヲ嫌シト云フ然レモ
名譽ヲ博セント欲シ生涯己レノ新郎ヲ嫌シト云フ然レモ
日耳曼ノ婚姻法ハ二百年ノ間ニ非常ノ變化ヲ受ケ近頃稍

流行シタル宗教婚姻僧徒ノ媒介ヲ以テノ如キハ中古支配
ヲ法律ニ受ケスシテ各自ノ良心ニ支配セシメ其婚スルト
否トハ自由ナリシニ幾クモ無クシテ復タ干涉ノ法行ハレ
僧徒等大ニ威力ヲ結婚ニ振ヒシモ是レ素ヨリ宗教ノ支配
スヘキモノニ非レハ一千八百七十三年ニ於テ復タ自由撰
擇ニ放任ス是ニ於テ新教ノ牧師等婚姻ハ最早一定ノ法例
ニ因テ行フハカラサルモノト確定セリ
英國ニ於テ民法ノ編纂ハ以テ婚儀ニ影響ヲ及サスト雖モ
日耳曼ハ之ニ反シ民法ハ確立以來大ニ宗教ノ勢力ヲ殺滅
シ最早婚姻ヲ左右スルノ威力ナカラシム故ニ日耳曼政府
カ保護ヲ教徒ニ加フルナカリゼバ教徒等ハ法律ノ變遷ト
共ニ零落ニ陥リシハ復疑フベカラズ何トナレバ日耳曼教

徒等其歲入トシテ頼ム處ハ大抵婚姻ノ費儀ニアレハナリ
幸ニ當時政府ノ保護甚ハダ行キ届キシヲ以テ零落ノ禍ヲ
免レシハ實ニ救徒ノ幸福ナリサテ日耳曼婚姻ノ有様ハ以
上ノ如シト雖モ然レモ曼人ガ婚姻ニ關シ如何ナル思想ヲ
有スルカヲ了解シ而シテ此婚儀ノ有様ヲ精細ニ知ラント欲
セバ婚姻條例ノ歴史ヲ穿鑿シ之ヲ講究セザルベカラズ若
シ其沿革ヲ討尋セバ假令ヒ多少ノ變化アリト雖モ人倫ノ
最大要部タル婚姻ニ對シテユイトコツク人ノ感情ハ依然
トシテ各人ガ腦裡ニ運動スルハ甚ダ明白ナリ又日耳曼ニ
於テ通例ヘルベングト稱スルモノハ英國ニ稱スル約東エンゲランド
大ニ差違アリ英曼兩國ノ婚姻ハ契約傳説ノ二個ヨリ成立
ス語ヲ換ヘテ之レヲ云ヘバ約東エンゲランド婚禮ツロイア

ソクノ二元素ヨリ組成ス英國ニ於テハ羅馬律ノ如ク婚禮マレリツシ
ハ最大要部ニシテ已ニ之ヲ行ヘバ始メテ婚姻ト認ム然ル
ニ日耳曼人ノ約東ハ緊要ニシテ且ツ有力ノ契約ナリ假令
ヒ婚禮ヲ行ハザルモ既ニ約束ヲ結ハ、婚禮ヲ履行セシニ
異ナラズト認定スルノ風習アルヲ以テ約束婚禮ノ二者相
互ノ關係ヲ論及スルノ前ニ當テ言語ノ意味ヲ説明スルハ
復タ無用ノコトニアラサルベシ抑モ曼人ノツロイアツロイアハ
英人ノ所謂許嫁ビロイアルニアラス左リナカラ文字其意義ヲ同フス
ルヲ以テ英人ハ一般ニヘルローバングヲ許嫁ト解シツロ
イアツロイアノ婚禮ト云モ其實已ニ結婚セシ者ヲ云フニアラ
ズ又將ニ婚セント約セシ者ヲ云フニアラザルナリ然ルニ
日耳曼ニ於テハ之ニ反シ其結約ノ後婚姻ニ至ルマテ女ヲ

六
ブヲト云ヒ男ヲブライナカント云フ如此ク其字義差違
アリト雖也元來日耳曼人ノ婚稱ハ一婦人ノ賣買ニシテ中
古ノ終リニ至ルマテ是ヲ結婚ト通稱セシニ今世ニ至リ婦
人賣買ノ思想ハ變シテ權力轉移ノ風俗起レリ凡ソ婦女子
ハ其身体柔弱軟脆ニシテ常ニ他人ノ抗抵ニ對シ己レが一
身ヲ保護スル能ハサル者ナレバ其始メ生ル、ヤ父ノ保護
ヲ受ケ其後嫁スルニ及メテハ夫ノ保護ヲ受ク之ヲ權力移
轉ト云フ昔シ封建ノ時代ニ當リ歐洲一般ニ俠客ノ士自己
ノ危難ヲ省ニス婦女子ノ安寧幸福ヲ計リシハ幾ンド此意
ニ外ナラス
夫レ許嫁ハ權力ノ移轉ニシテ保護ノ賣買ナリ故ニ其代價
ハ今日ニ至ルモ依然トシテ變セサルノミナラス法律ニ依

七
レハ之ヲ女子ノ代價ト呼ブ然レ此國婚姻ニ關シ輿論ノ
變遷セシ徵候ハ其賣買代價ノ一定セシヲ以テ知ルベシ是
ヲ以テ保護權ノ賣買ハ假令市場ニ亂高下ヲ生スルモ奴隸
相場ノ如ク決テ變スルヲナク且容貌ノ醜美ヲ以テ毫モ價
額ニ關係ヲ及ボサズルナリ何トナレハ國法確定以來女子
ハ最早市場ノ相場ニアラズ只保護ノ價直ト云フニ止マル
ノミ故ニ女子ノ父タリ婦女ノ夫婿タル者其權勢ノ行フ所
貧富醜美ニ依リテ懸隔ヲ爲サス皆一樣ニシテ異同アルヲ
ナシ今熟テ古昔婦人ノ價值ハ如何ナルモノナリシカヲ考
フルニサリツクフランクス人ハ六十二圓五十錢ヲ以テ賣
買セシニサキソン人ハ三百圓ノ高價ニアラサレバ賣ラザ
リシト實ニ當時ノ婦人ハ不幸ニモ男子ノ斷弄物トナリ畢

生ノ保護ヲ男子ニ仰ガザルヲ得ザレハ其地位今日ノ如ク
獨立ナル能ハス而シテ其保護權ヲ變スルノ時ハ則チ新郎
ト閨ヲ共ニシ百年ノ契リヲ結ブノ時ナリ以上論スルカ如
ク婦女一身ノ保護ハ全ク男子ニアレハ其婚姻ノ契約ヲナ
スモ亦保護者其人ニヨラザレハ國法ニ於テ効力ヲ有スル
モノニアラズ唯此際婦人ノ有スル特權ハ拒絕スルニ止マ
ルノミ然レモ已ガ意ヲ固執シテ保護者ノ言ニ從ハサルカ
如キハ到底望ムベカラズ加フルニ日耳曼ニ於テハ單ニ結
婚ノ契約ノミチ以テ實際ノ權力ヲ變換セサレハ假令口約
束ヲナスモ決シテ有効ノ者ト謂フベカラサルハ猶ホ一田
一牛ノ賣買ニ於ルカ如シ其價值ヲ仕拂ハサル間ハ己ニ約
束ヲナスモ亦有効ト謂フベカラス故ニ此ノ如キ場合ニ於

テ假令記名捺印ノ手數已ニ終ルト雖モ万一法庭ニ訴フル
時ハ敗訴トナルヤ必セリ故ニ結婚ノ約ヲナセハ直ニ保護
料ヲ拂ハザル可カラズ已ニ之ヲ拂ハバ婦女ハ直ニ結婚者
ノ所有物トナル亦猶一田一牛ノ如シ然レモ已ニ保護料ヲ
拂ヒ而シテ未タ夫婿ノ家ニ入興セサルノ時ニ當リ万一不幸
ニシテ婦女ノ死亡スルトキハ其保護料ヲ返還セシム是亦
法律ノ定ムル通則ナリシモ上古ニアリテ人智未ダ開ケザ
ルヲ以テ財産ノ保護今日ノ如ク完全ナラザレハ通常物品
ノ賣買モ其金額ト物品トヲ直チニ交換スルニアラザレハ
猥リニ代金ヲ前納スルカ如キハアラザルナリ況ンヤ婦女
未ダ己カ妻トナラザルニ保護料ヲ前納スルカ如キハ曼人
ノ尤モ好マザル所ナリ何トナレハ万一其婦女未ダ己レガ

有ニ歸セザルニ一朝事ヲ以テ此契約ヲ履行セシムル能ハ
サル場合若クハ其婦死去スルニ逢ヘバ忽チ自己ノ金靈ハ
底ヲ顯ハシ再ヒ婚ヲ他ニ結ブノ資力ヲ有セザルニ至ルモ
法律ノ力ニ依頼シテ之ヲ償却セシムル能ハザレバナリ是
ヲ以テ保護料ノ前納ハ政府モ敢テ之ニ關涉セズ只手金若
干ヲ拂ハシムルノ慣例ナリシカ日耳曼ニ於テ此ノ弊風尙
存シ一婦婚ヲ約スルキハ手金ヲ受ク若シ之ヲ受ケザル時
ハ其契約ニ背クモ敢テ故障ヲ其間ニ入ルベカラズト實ニ
野蠻時代ノ風習ハ奇々怪々人ノ意表ニ出ツト雖モ是レ獨
リ日耳曼ノミニ止マラス英國ニ於テモ亦此ノ風俗大ニ行
ハレシヲ見ル是レ彼ノ所謂シインスモニト稱スルモノ
ニシテ契約ヲ證スルノ爲メ婦女ヨリ之ヲ要求シ而シテ其金

ハ大概酒肴ヲ買ヒ或ハ貧人ニ投セラル、ノ用ニ供ス然リ
ト雖モ此ノ手金ハ以テ契約ヲ鞏固ナラシムルニ足ラズ只
約束ヲ証スルニ止マルノニ何トナレハ當時此ノ順序ヲ踏
マザルノ契約ハ無効ニ屬スルヲ以テナリ
此風習ノ行ハル、國ハ英曼兩國ニ止ラズフランス
人中第五世記ノ昔シ既ニ流行セシヲ見ル然リト雖モ如此
キ蠻風ハ決シテ永續スベキモノニアラザレハ社會ノ形勢
日々變遷シ人智ノ發達月ニ進歩スルニ從ヒ自然ニ影響ヲ
受ケ終ニ廢滅ニ歸セザルヲ得ズ其己ニ廢滅スルニ至テハ
世人妻ヲ娶ルモ結婚ヲ履行セザルノ間ハ決シテ手金ヲ交
附セズ且ツ五世紀以前ニアリテハ此ノ手金ハ婦人ノ保護
者ニ交附シ來ルモ是レ亦變遷シテ婦人嫁スルノ後其配偶

(今ノ佛人)

者鬼籍ニ入ルノ后婦婦ノ餘生ヲ送ルノ間后見人即チ第二
保護者ヲ要メサルヲ得ス彼ノ手金ナル者ハ此第二保護者
ニ附與スルノ例トハナレリ今其故ヲ尋ヌルニ婦人一家ノ
主婦タルノ間ハ其配偶者ニ對シ謹直實體轉々、世人ノ稱
賛ヲ得タリシモ其一旦婦婦トナルニ及ンテ節操ヲ汚シ婦
徳ヲ顧ミス途ニ累ヲ後見人即チ第二ノ保護者及コホス者
新聞雜誌ノ報スル所ヲ見テ以テ知ルニ足ル故ニ此手金ヲ
保護者ニ附與スルハ恰モ慰勞金ノ如キ觀相アリ實ニ第九
世期ノ頃流行セシ保護料ハ他人ノ妻タルノ價直ニアラズ
シテ婦婦タルノ豫備ト謂モ不可ナカルベシ是ヲ以テ配偶
者タル者己レカ死後妻ノ保護者ニ附與スベキ慰勞金ハ豫
ノ之レカ備ヲナシ死後必ヲズ之ヲ交附スルノ意ヲ示サ

ルベカラス是則英語ノ謂ユルウエツチングニ其意蓋シ
配偶者ハ必ス婦ノ保護者ニ慰勞金ヲ附與スベキノ意ヲ表
スル者ナリ斯ノ如キノ法律ハ第五世紀ノ頃ヨリ第十一世
紀マデアングロサキソン(現今ノ英國人)人中ニ行ハレ後流レテ
ノルマンニ入リシニアルプレットエセルバートノ法律ニ
比較セハ其意大同小異差シタル變化ナシト雖日耳曼ノ
法律ニ至テハ大ニ英國ノ法典ニ反シ假令ヒ結婚ノ約ヲナ
スモ其際直ニ保護金ヲ仕拂ザレバ効力ヲ有セサルナリ故
ニ配偶者鬼籍ニ入ルノ後婦婦保護ノ用意ヲナサント欲セ
ハ先婦人ヲ迎フルヲ以テ一般ノ風俗ナリトス故ニ或ハ月
矢ノ如キ典物ヲ婦ノ保護者ニ與フル者アリ是尙ホ其昔シ
羅馬地方ノ人種典物ヲ其酋長ニ獻シ万一事アルノ日ニ當

リ身ヲ捨テ忠勤ヲナスノ意ヲ表セシ風習アリシカ如シ若シ右ノ典物ナキ時ハ人民其酋長ノ命ヲ奉セザルモ可ナリ故ニ婦ヲ娶ルモ新郎ト保護者ノ契約ハ必要ニシテ缺クベカラズ万一婦人ノ密夫ト脱走スル如キコトアリテハ婦人ノ保護者タルモノ婦人ニ歸宅ヲ促シ償金ヲ請求ス而レハ婦人ノ歸ルヲ好マス又償金ヲ出サレバ家族ノ權理ヲ失ヒ父母ノ財產ヲ遂ニ讓受スルノ權利ハ消滅スルモノトス

第二章 婚姻ト宗教ノ關係

古昔日耳曼人ノ風俗以上論スルカ如ク男女ノ間斯ノ如ク相懸隔セシモ今日ノ如ク女權ノ強大ヲ致セシハ是レ果シテ何等ノ原因アツテ然ルヤ其原因タル素ヨリ一ニシテ足ラズト雖モ其最大原因ヲナセシ者ハ耶蘇教與リテ大ニ力ア

リ故ニ中古ニ於テ新婦ト保護者ノ地位ニ變化ヲ及ボシ婦女ノ權力ヲ得ルニ從ヒ己レカ意思ヲ發言シ己レカ思想ヲ主張スルニ及ンテ保護者ハ以前ノ地位ヲ失ヒ婦女ニ關シテ一モ喙ヲ容ル、能ハサルニ至レリ元來保護者ハ婦女ノ結婚ニ際シ特權ヲ振ヒシカハ婦女ハ唯之ヲ拒絕スルニ止マルノミナリシコ世ノ次第ニ變遷スルニ從ヒテ今日ハ婦女自由ニ婚ヲ約シ保護者反テ拒絕ノ權ヲ有スルニ至レリ然レハ婦女若シ保護者ノ拒絕ニ從ハザル時ハ父母ノ遺產ヲ享有スル能ハザルハ尙男尊女卑ノ弊風存在スルヲ見ルニ足ル

斯ノ如ク婦女ハ其地位ヲシテ高尙ナラシムルト雖モ契約ノ方法ニ至テハ只多少ノ變化アリシノミ即チ手金ヲ保護

者ニ拂ハズシテ直ニ新婦ニ附與スルニ至レルコト是ナリ其
金タルヤ僅コ一シルリングニ過キサレハ契約ノ際僅ニ一
塚ノ料ニ充ルノミ加之ナラズ日耳曼ニハ指環ヲ授受スル
ノ風アリ此風其始メ羅馬ヨリ來リシ者ニシテ婚姻ヲ約ス
ルノ際契約ヲ証セント婦女ニ與ヘラレタリト雖モ今日ノ
如ク互ニ之ヲ交換スルノ風習ナク唯中等社會ニ於テ金貨
ノ贈與盛ニ行ハル、ヲ以テ指環ノ贈與モ金貨ノ流行ニ及
バザリキ然レモ其價ヒ高貴ナレバ下等ノ細民ハ供給ノ資
ニ乏シケレバメックルンパーク侯ハ銀貨ヲ鑄造シテ細民ノ
用ニ供セリ此ノ銀貨ノ價ヒハ殆ント我三圓ニ當レリ是ヲ
以テ世人諺ヲナシテ曰ク婚姻ハ三圓ナリト其意蓋シ一婦
ノ賣買ハ三圓ナリト云フニ在リ

茲ニ又日耳曼ニ於テ婚姻ヲナスニ當リ契約ヲ結ブハ最大
必要ナリト雖モ婚禮ハ只儀式ニシテ契約ノ決定ニアラズ
畢竟入興式ニシテ恰モ農夫牝牛ヲ贖ヒ之ヲ己レガ腕ニ送
ルガ如シ是ヲ以テ假令農夫現ニ所有セザルモ其實際牝牛
ノ所有者ハ農夫タルコト結約ノ時ニ始マルヤ明白ナリ是レ
所謂ル日耳曼人ガ婚姻ニ關シ懷シ所ノ意ニシテ獨逸語ノ
ツロエント其義相均シ先哲サツクセン、スパイセル云ヘ
ルアリ凡ソ婦女ノ男子ニ嫁スルモ其夫即チ婦ノ保護人
タリト而シテ婦女ノ父其女ヲ他ニ嫁スルハ所謂ル支配チ新
郎ノ掌中ニ移シテ婦ノ一身ヲ依託スルニ在リ此際ニ當テ
種々ノ儀式アリト雖モ今其一例ヲ舉ゴ婦女ノ父タルモ
ノ劍及帽子或ハ上衣ヲ以テ配偶者ニ贈與スルノ風習アリ

是等ノ意ヲ推知スルニ其劍ハ蓋シ生殺與奪ノ權配偶者ノ
手ニ歸スルノ徵候ニシテ其上衣ハ婦人新郎ノ家ニ於テ十
分保護セラル、ノ意ヲ表スルニ外ナラザルベシ
凡ソ地球上何レノ所ヲ問ハズ國アレバ人民アリ人民アレ
ハ男女婚ヲ結ブハ人倫ノ然ラシムルモノロシテ儀式風習
ハ其國文明ノ程度ニヨリ多少ノ異同ナキ能ハズサレバ日
耳曼ニ於テモ婚姻ノ儀式ハ右ノ如ク異様ノ風習ナリシモ
社會ノ有様日ヲ逐フテ文明ニ進ムニ從ヒ婚儀ノ式モ亦大
ニ變化ヲ生シ以前婦女ノ保護者タルモノ權力最大ニシテ
其婦ヲ取扱フハ恰モ牛馬ノ如シ實ニ人ヲノ男尊女卑ノ風
習斯クモ強カリシカト喫驚措ク能ハザランメタルモ其威
力次第ニ變遷シテ遂ニ女權ノ勢力ヲシテ幾ント男子ヲ壓

倒スルニ至レリ今其一証ヲ舉ゲンニ第十二世紀ノ頃ニハ
婚姻ノ式ニ牛耳ヲ執ル者ハ婦女ノ父ナリシガ第十四世紀
ニ至ルニ及ンデ婚姻ノ式ヲ媒介スル者ハ新婦自ラ之ヲ撰
擇スルニ至レリ此ノ間媒介者タル者假リニ婦女ノ父タル
ノ資格ヲ以テ結婚ヲ執行シタル者ハ彼ノ有名ナル曼國化
學士バレンタン巴里斯ニ於テナシスニ婚セシヲ以テ嚆
矢トス然レニ第十三世紀ノ古事ニヨレハ結婚ノ媒介者ハ
其國ノ皇帝若クハ大王ニアラザレハ何人モ行フ可カラザ
ルノ制ナリシニ世ノ變遷ト共ニ此ノ風衰レ僧徒式場ニ臨
ムニ至レリ然レニ結婚ハ素ト俗事ニシテ寺院僧徒ノ干涉
スベキモノニアラザレハ其式場ニ僧侶ノ臨ムアルモ只証
人タルノミニシテ婚姻ノ式ヲ行ヒ入興ノ事ヲ周旋スルニ至

リテハ保護者之ヲ行ヒ僧徒チノ之ニ關係セシメザラシム
サテ此ノ式ニヨリテ婚ヲ行ヒ然ル後新郎新婦互ニ手ヲ携
ヘテ寺院ニ詣リシ後ハ鴛鴦ノ如ク出入相伴フモ亦人ノ怪
ムモノナシニヘランゼンノ時女王ガンサー婚ヲ結ビシモ
亦直ニ寺院ニ詣リ然ル後即位ノ禮ヲ行ヒタリト余嘗テ十
三世紀ノ頃スアピアニ於テ農夫ノ婚姻スル繪畫ヲ見シニ
新郎ノ婚スルニ當タリ兩親相議シテ其婦ノ財産ヲ定ムル
ニ蜂巢三個馬、牝牛、犢牛、山羊各一匹ヲ以テシ而シテ夫婿
ノ家ヨリハ羊二匹雄雞一牝雞十四及ヒ金二ポンドヲ受ク
ルヲ見ル嗚呼社會未タ開ケス人智曠昧タリシ時ノ風習ハ
憫笑ニ堪ヘザルナリ然レモ曼國古代ニ於テ下等人民ハ宗
教ノ式ヲ用ヒス結婚ノ後近隣ノ家族ヲ招集シ一大饗宴ヲ

張リ酒酣ナルコ及ビ新郎新婦宴席ニ臨ミテ相驅逐シ新郎
新婦ヲ生擒シテ婚室ニ入ルノ風ナリシモ上等社會ハ稍々
之ニ異リ宴終ルノ後羅馬寺院ノ神殿ニ詣リ其且日夫婦手
ヲ携ヘテ一大供養ヲ受ク此式ニヨリテ婚ヲ結ビシハ邊理
第一世ナリ(英王)降テ中世ニ至リ僧徒等婚姻ノ改革ヲ企テ
婚姻ハ人世重大ノ要件ナレバ俗人ノ輕シク行フベカラザ
ルモノナリ故ニ婚ヲ結ブコハ僧徒ニ依頼セザルベカラズ
ト然レモ人民此ノ干涉ヲ怒リ之ニ從ハサルヲ以テ僧徒等
止ヲ得ス一步ヲ人民ニ讓リ更ニ英國ニ行ナハル、朝夕祈
禱ノ如キ二個ノ儀式ヲ案出セリト云フ是ニ於テ婚禮ハ復
タ宗教ノ干涉ヲ免レ婚禮ハ恒ニ新婦ノ家ニ於テ之ヲ執行
シ僧徒チシテ證據人トナシ其紹介ヲ以テ新夫婦適宜ノ指

環ヲ交換シ而ル後接吻ノ禮ヲ行ナフト雖也中古以前ニ於
 テハ僧徒モ亦接吻シタリシニ羅馬法王威權ヲ振フニ及シ
 デ此弊風ヲ廢セリ是ニ於テ衆僧或ハ神學者等スベインノ
 トレントトニ一大會議ヲ開キ衆議ヲ以テ僧徒ノ婚姻場ニ望
 ミ新夫婦ヲ紹介スルヲ廢シ唯俗人ノ資格ヲ以テ式場ニ臨
 ミ其婦ノ父トナリテ保護者タラントヲ議決セリ
 茲ニ又アレヤツクノ法律ニヨレバ他人ノ妻ヲ橫奪スル者
 ハ八十圓ノ罰金ニ處シ若シ之ヲ返附セザレハ更ニ四百圓
 ヲ追加セシメ其橫奪スル處ノ婦人万一婚ヲ約シテ未ダ禮
 式ヲ行ハザル者ハ二百圓ノ罰金ニ處シ之ヲ返附セザルキ
 ハ四百圓ヲ追加セラレ、前ノ如クセラデハト王ノ時ニ
 當テ人若シ婚ヲ約シ而ノ七年ヲ過クルモ未ダ自己ノ家ニ

迎ハザル時ハ世ノ輕蔑ヲ受ケ又其約ヲ成就スル能ハサル
 ナリ然レモ是ニ羅馬ノ法律ニ反スル處ナリ羅馬ノ法律
 ニヨレバ婚姻ト云ハバ夫婦共ニ生活スルノ謂ニシテ日耳
 曼ノ如ク始メ約ヲ結ビ其後入興ノ式ヲ行ヒ然ル後夫婦室
 ヲ同フスルカ如キニアラズ故ニ羅馬ノ法律ニ於テハ結婚
 ハ入興スルノ意ニシテ即チ婦ヲ迎フルノ契約ナリ斯ノ如
 ク婚姻ノ意義ニ關シ羅馬兩國其説ヲ異ニシ二説紛々何レ
 カ其真ナルヲ知ラズト雖也伊太利亞ノ寺法ニヨレバ羅馬
 法ト粗其主義ヲ同フスルヲ以テ婚姻ノ意義ヲ決センコトハ
 例證ヲ各國ニトリ其是非得失ヲ講究スルニアラザレバ遽
 カニ論シ易カラザルモ余ハ暫クグレシアンノ説ニ從ハン
 此ノグレシアンナル者種々ノ證據ヲ古今ノ書籍ニ求メ以

テ其是非ヲ駁論シ而シテ後許嫁ヲ婚姻ト断定シタルモノナ
 レバ大過ナカルベシ左リナカラセントオীগスチン及ヒ
 レヲ等ノ如キ著名ノ人士ナルモ唯羅馬ノ法ヲ知テ曼國ノ
 法律ヲ知ラザルノ故ヲ以テ婚姻ノ大要ハ婦人入興ノ日ヨ
 リ世人始テ之ヲ識認スト想像セリ故ニ若シ婦人未タ入興
 セザレバ假令ヒ約束ヲナスモ確固不拔ノモノニアラザル
 ナリト断定スルコト至レリ英王ヘンリー第八世アラゴンノ
 ガゼリント婚スルニ當リ羅馬法ト日耳曼法トノ間ニ於テ
 非常ノ衝突起リシモ亦此法律ノ見解ニ異同アルニ坐スル
 ノニ今其原因ヲ尋ヌルニ日耳曼ノ法ニヨレバ彼ノガゼリ
 ンナル者ハ已ニ業ニ婚姻ノ禮ヲ行ヒタレバ其夫婦タルニ
 於テハ相違ナシト雖モヘンリー王ハ素トカゼリント血統

チ一ニスルヲ以テ此ノ婦人ト結婚セバ明淫ノ誹謗ハ蓋シ
 免ルベカラス是ニ由テ之ヲ觀レバ羅馬法ノ所謂許嫁ハ日
 耳曼法ノ許嫁ト意義ヲ異ニスルヤ明ケシ故ニ斯ノ如キ婚
 姻ハ日耳曼ノ法律ニ於テハ正當ノモノト認定セザレバガ
 リカン及トランサハパイオンノ贊成ヲ得ザルハ固ヨリナ
 リ故ニ曼國ノ法律博士或ハ學士等此人造ノ區別ヲ廢セン
 ト主張シテ曰ク苟モ婚ヲ日耳曼ニ結ブ者ハ宜シク我カ法
 律ヲ遵守シ羅馬ノ法ニ從フベカラス若シ之ニ反スルハ
 假令ヒ婚ヲ結ブモ有效ノモノニアラサルナリト此ノ時ニ
 當リ彼ノ宗教改革ヲ以テ世界ニ英名ヲ轟カシタルマルチ
 ンルীগーノ如キモチユートニツク法（日耳曼ト幾ノト其
 意ヲ同フスル者）
 又ハ寺法ヲ主張シテ曰ク此ノ寺法ニ從ヒ婚ヲ結ババ假令

ヒ其配偶甚々惡シト雖モ是レ所謂眞ノ婚姻ニシテ決シテ
變スベカラズ何ントナレバ彼ノ寺法ヨリテ婚ヲ結ブハ
眞神ノ面前ニ於テ誓言シタルカ如ク一種貴重ノ權理ヲ有
スレバナリ故ニ其配偶者タルモノハ所謂眞ノ配偶者ナレ
ハ必ラズ俗老ノ情義ヲ全フシ之ヲ放棄スベカラズ若シ一
時ノ變心ヲ以テ之ヲ放棄スル時ハ即チ眞神ヲ欺負シ姦淫
ノ犯罪タルヲ免レズト然レモ世ノ文明ニ進ムニ從ヒ以上
ノ混雜ハ次第ニ跡ヲ絶チ曼國黒林ニ於テ男女婚ヲ結ビタ
ルカ如キ野卑ノ風俗一變シ女尊男卑ノ風大ニ行ハレ英國
ノ如キハ女子ニ政權ヲ與フルノ動議ヲ國會議場ニ提出セ
ルモノアルニ至リシヲ以テ女子ノ保護者ハ既ニ權勢ヲ失
ヒ婦女己レガ身ヲ處スル自由ナリシヲ知ルニ足ル是ニ於

テ宗教者復之ニ干渉セント企圖シテ曰ク婚姻ハ人生ノ大
倫ナリ能ク慎ンテ行ハサルベカラズ若シ被婚ノ舉動アラ
ハ即倫理ヲ破壞シ道德ヲ紊亂スル一大原因ナレバ此ノ弊
害ヲ未萌ニ防ンニハ其始メ婚式ヲ行フニ當リ僧徒之ニ臨
ミテ保証人トナリ又祈禱者トナルベシト喋々辨論スルモ
未ダ社會一般ヲ之ニ風化セシムルノ勢力ナカリシモ幸
ニシテ曼入ラマルケンナルモノ此說ニヨリ婚ヲ結ビシヲ
以テ今日曼國舊家ノ壁上ニ於テ此圖書ノ輝クヲ見ルモ此
ノ先例以テ他ヲ攪起スルニ足ラサレハ寺院ノ干渉復タ其
功ヲ奏スル能ハス遂ニ婚姻ノ全權ハ俗社會之掌握ニ歸セ
リト云フ

第三章 婚姻ト宗教ノ關係(二)

凡ソ物一利アレハ一害アリ一得アレハ一失アルハ人生免
 ルヘカヲサルノ通理ニ天下ノ事此ノ原則ノ範圍ヲ超ユ
 ル能ハス此ヲ以テ曼國婚姻ノ法ハ宗教ノ干涉ヲ免レ稍々
 自由ニ赴キ人々甚々便利ヲ感スルニ至ルモ離縁ノ弊風ハ
 結婚ノ自由ト追隨スルハ亦免カル可ヲサルノ通理ナルカ
 宗教干涉ノ時ニ當テ一旦僧徒婚姻ノ式ニ臨ミテ之ヲ決定
 セシ上ハ假令琴瑟ノ調和其ノ意ヲ得サルモ爲メニ離縁ノ
 請求ハ決シテ行フヘカヲサルニ今ヤ然ラス離縁スルモノ
 續々踵ヲ接シテ起ル而シテ其口實トスル所ハ結婚ノ以前
 於テ他ノ情夫ト既ニ駕袞ヲ同フスルニアリマルナシ
 ザ一ノ言ニ曰ク世ノ離縁ヲ企圖スル者屢々余カ面前ニ來
 リ哀訴シテ曰ク吾等偕老ノ契ヲ結ビシヨリ一堂ノ上ニ好

合ニ同穴ノ情願ヲ全フスルハ吾等ノ企望スル所ナリト雖
 モ如何セシ我等兩人ノ間止ムヲ得サルノ事情アリテ此情
 願ノ約ヲ全フスル能ハサル者アリ其理由ハ吾等ト既ニ未
 タ婚式ヲ舉ゲザルノ前他ニ密約スル所ノ情夫アリト雖モ
 其徳ヲ二三コシ終ニ余ト夫婦ノ契約ヲ結ブニ至レリ之ヲ
 思ヒ之ヲ思ヘバ夕々晨ニ達スルニ至ル實ニ心中ノ辛苦言
 辭ヲ以テ辨スル能ハズ筆紙ニヨリテ盡ステ得ザルナリ希
 シハ賢明寛仁ナル足下宜シク救ヒ賜ヘト斯ノ如キ者屢余
 カ家ニ來ル而シテ之ヲ攘斥スルハ吾輩僧侶ノ屑シトセザル
 所宜シク斯ク憂苦ヲ懷ク者ニ教訓ヲ與ヘ之ヲ勸諭スルハ
 吾輩神學者タル者ノ義務ナリ然レモ吾輩神學者如何シテ
 之レカ處置ヲナスカ万一之ヲ法庭ニ訴フル時ハ古來ノ習

慣ニヨリ判断セラル、ヤ必セリサテ古來ノ習慣ニ從ヒ判
セラル、時ハ假令ヒ如何ナル秘密即不正ノ契約ト雖ヒ是
ヲ以テ正當ノ結婚ト認定シ其契約ヲ履行セシムルニ至ル
ハ復タ敢テ疑フベカラザルナリ故ニ新夫婦一旦約ヲ結ビ
同允ノ情願濃ナルモ憫レムベシ此ノ判決ニヨリ愛ヲ割ヒ
テ最初ノ密約ヲ履行セサルヲ得ス尙ホ甚ハダシキニ至
リテハ正當ノ式ヲ以テ結婚シ已ニ十人ノ子女ヲ設ケ夫妻
相互ノ財産ヲ合併シテ子孫永久ノ策ヲ計畫スルアリト雖
是亦偕老ノ樂ヲ俱ニスルヲ得ス何トナレハ上帝ノ許ス
所ハ最初ノ婚コアリテ再婚コアラザレバナリ然レ一旦約
ヲ結ビ正式ヲ以テ婚セバ假令ヒ他ニ如何ナル情夫ノ密約
スルアルモ一切意ニ介セズ其妻ハ即チ妻ナリト主張シテ

離婚ヲ肯セサルモノ世間其例多シ加フルニ其所謂ル先約
ナルモノハ秘密ノ約ニシテ決シテ証據人ノ如キハアラサ
ルニ其再約ハ公然正式ヲ蹈ミ僭徒之ニ臨ミ社會既ニ認可
セシ者ナレバ婦女ニ於テモ亦之ニ背クニ忍ビサルハ人情
ノ然ラシムルモ前陳ノ判決ヲ免カレサルハ婦女ノ心中憫
レナリト云フベシ又ル「サ」ノ記應書ヲ見ルニ一章アリ
曰ク吾嘗テ寺庵ニ閑居セシキ深夜吾ガ家ヲ叩キ面會ヲ要
スル者アリ起テ之ニ面接スルニ曰ク余ガ親愛ナル足下ヨ
余ハ密ニ約スル所ノ女子アリ其名ヲグレテルトテ最ト優
美ノ女子ニ余ガ最モ愛スル者ナリ然レ其後故アツテ
婚ヲバーバラナル一女子ニ結ヘルヲ以テグレテテ其妻
ト稱スル能ハサルモ共ニ日月ヲ送迎スル久キヲ以テ余ガ

三十二
心少レテルヲ鍾愛スト雖ヒ余既ニ他ノ一婦人パーバラヲ
娶リシヲ以テ少レテルヲ迎フル能ハズ然レヒ世人幸ニ此
ノ關係ヲ知ラザルヲ以テ少レテルモ亦他ノ一男子ニ嫁セ
リサレバ余ハ早晚教法ノ宣告ヲ受ケ結婚ノ義務ヲ雙方即
チ少レテルパーバラニ盡スベカラザル明白ナリ寛大仁慈
ナル足下願クハ余カ失望ヲ憫レヨ幸ニ之ヲ救ヒ賜ヘト當
時ルイザノ勘解ハ羅馬ノ法王ト雖ヒ一言ヲ其間ニ挾ミ
テ犯法者ヲ罰スルヲ得ザレバナリ然ルニ婦女ノ位地今日
ノ如ク男子ヲ壓倒スルニ及ンテ諸國ノ牧師等一大會議ヲ
開キチユトニツク法ニ反セズ復カリシアン風ニモ戻ラザ
ルノ婚姻條例ヲ確定セント力ヲ盡セヨニ議一致セズシテ
空シク解散スルニ至レリ是ニ於テ彼ノ有名ナルルイザノ

氏ノ一ノ婚姻法ヲ編成シ之ヲ時ノ政府ニ奉呈ス其主眼ト
スル所ハ重ニ日耳曼古代ノ婚姻法ニ從ヒ立案セシモノニ
シテルイザノ派ノ者多ク此ノ説ヲ贊成シ千八百年代ニ至
ルマデ流行セリト云フ此ノ説ノ起ルヤ四方寫々其是非ヲ
論シ婚姻ニハ復ターノ規律存スルモノナキガ如シ是ニヨ
リテ諸國ノ僧正或ハ牧師又ハ教師等再ヒ西班牙ノトレン
トニ集會ヲ催フシテ反復討論ノ末終ニ曼國ノ風習ト羅馬
法ヲ折衷シタル一新法ヲ編輯セリ此ノ新法ニヨレバ至當
ノ証人アリ且ツ正統ノ理由ヲ有スルモノハ決シテ不正ノ
婚姻ニアラザルナリト然レヒ久シク曼國風俗ノ行ハレタ
ルノ地方ニ至リテハ婚姻ノ際新夫婦ヲノ神殿ニ祈念セシ
メズ只寺領ノ僧徒ヲ聘シテ婚姻ノ証人タラシムルニ止マ

ルヲ以テトレントノ會議一布告ヲ出シテ曰ク凡ソ婚姻ノ
禮ヲ行フニ當テハ三人ノ証人ヲ要ス其中一人ハ寺領ノ僧
侶タル可シト此ノ時ニ當テトライデンナン氏ナル者アリ
婚姻法ノ改革ヲ企テ種々ノ義務儀式ノ如キ者ハ之ヲ廢シ
其他新夫婦互ニ手ヲ携ヘ寺院ニ詣ルカ如キハ只人民ノ意
ニ放任シテ敢テ干涉セザルニ至リシヲ以テ稍變化セリト
雖ヒ其大變化ヲ受ケシハ蓋シ羅馬法ヲ採用セシニ始マル
第十七世紀ノ頃ニ當テボースサイアラスナル者アリ此
ノ結婚ニ關シ世人ノ喋々スルヲ見テ之ヲ駁シ曰ク世人ハ
許嫁ヲ目シテ婚姻ト云フハ是レ果シ何ノ謂ヒゾヤ余ヲ以
テ之ヲ見レハ大ナル誤解ト云ハサルヲ得ス何トナレハ許
嫁ハ男女互ニ意氣相投シテ將ニ婚ヲ結ハントスル者ナレ

ハ一朝素志ヲ變シ破約スルモ決シテ犯法ニアラザルハ恰
モ蹴鞠ノ遊技ヲナスニ當リ一人ノ鞠ヲ與ヘバ一人ノ之ヲ蹴
ルノ習慣ナルモ若シ中途ニシテ其意ヲ變ゼズ鞠ヲ蹴ラザ
ルモ不可ナキガ如シト辨論スルモ勢力以テ當時ノ浮説ヲ
壓スルニ足ラズ故ニパッフヘンドルフ並ニホーメルノ徒相
踵ヒテ起リ婚姻新説或ハ婚姻新法ノ如キ書ヲ著ハシタレ
是亦世人ノ意ヲ奪フ能ハズ其後千七百年代ノ末ニ至リ
奇妙ノ説普魯西ニ於テ流行シ婚姻ヲノ僧徒ノ支配ヲ受ケ
シメントセリ故ニ僧徒ノ支配ニヨラザルノ婚姻ハ正統ノ
モノニアラザルナリト云フニ至ルモ議論ノ多岐ナル人ヲ
シテ其是非得失ヲ識別スルニ苦シマシム故ニ愚蒙ノ人民
ハ五里霧中ニ彷徨シ婚姻ニ規律ナキガ如シ是ヲ以テ社會

ノ道徳ハ幾ント地ヲ拂ヘリ何トナレハ婚姻ノ規律ニ從ヒ
 婚ヲ結フコト非サレハ離婚ヲ企圖スルモノ多數ナルハ自然
 ノ理ナリ夫レ離婚ヲ企圖スルモノ多數ナルキハ道徳ノ衰
 替ハ蓋シ免ルベカラザルノ數ナレバ此際ニ在リテ秩序ノ
 紊亂ヲ憂フルモノアリ曰ク當時世ノ婚姻ヲ論スルモノ概
 テ許嫁ヲ辱ビ禮式ヲ卑ムト雖モ是誤解ノ甚シキモノト云
 ベシ何トナレハ新郎新婦ノ名稱ノ起ル所以ノ者入興式ニ
 在リ然ルニ此ノ入興式ヲ辱マズシテ許嫁ニ意ヲ止ルハ其
 罪尙契約ヲ破リ離婚ヲ企圖スルモノニ異ナラズ嗚呼道徳
 ノ日ニ衰頽シ社會ノ月ニ紊亂スルモノ亦故ナキニアラザル
 ナリト是ニ於テカマルサス論者世ニ輩出シテ怪説ヲ唱ヘ
 リ余(記)一日事ヲ以テフランコニア洲(曼國)新教徒ノ村

落ニ至リ其地有名ノ旅館ニ寓居セシニ風采最モ美麗ナル
 一婦人アリ小兒ヲ擁シテ街上ヲ徒步ス余之レヲ目送スル
 ニ其風采ノ貧人ニアラザルヲ疑ヒ之ヲ主人ニ問ヘバ曰ク
 彼ノ婦女ハ此ノ地名家ノ女子ニシテ未ダ嫁セサルニ故アリ
 テ一子ヲ擧ケリ云々嗚呼文明ヲ以テ社會ニ競争スル歐洲
 諸國ニアリテ如此ノ品行ハ世人ノ最モ耻ツル所ナリ然レ
 此此地ノ人民恬トシテ耻ヲサルハ亦以テ道徳ノ衰替ヲ證
 スルニ足ル是ニ於テ日耳曼政府ハ千八百七十五年一月六
 日ヲ以テ左ノ條例ヲ發布スルニ至レリ

第一條 男女婚ヲ結ハント欲スルモノハ已婚者二人
 ヲノ証據人ヲラシムベシ而シテ政府ハ官吏ヲ特派シ新
 婚者ノ意思ヲ尋問シ然ル後始メテ婚姻ヲ許可スベシ

第二條 僧侶或ハ牧師等總テ宗教ニ關係アル者ハ官
 吏ニ代リテ尋問ヲナスヲ得ズ
 右ノ條例ヲ頒布スルヤ日耳曼僧徒ハ大ニ不平ヲ唱ヘ依テ
 會議ヲ開キテ新法ノ可否ヲ議シ總代ヲ撰ンテ政府ニ建言
 ジ或ハ失望ノ餘リ黨與ヲ結ビテ腕力ニ訴ヘント大ニ僧侶
 社會ノ騷擾ヲ惹キ起セリ然レモ主管局ヲ設ケ結婚ヲ支配
 セシハ唯々曼國ノミナラス英國ニ於テモ亦此ノ設ケアリ
 シモ時ノ英政府ハ各自ノ意ニ放任セシチ以テ婚姻局ノ設
 ケアルモ結婚ハ必ラズ該局ニ依ルヲ要セサレバ僧徒ノ手
 ヲ經テ婚ヲ結ブ者ノ數ヲ減ズルニ至ラザリシモ日耳曼ニ
 於テハ止ヲ得ザルノ事情アルニ非サレバ必ラズ婚姻局ノ
 手ヲ經ザル可カラザルノ故チ以テ僧侶ニヨリテ結婚スル

ノ數ニ大ナル影響ヲ及ボセリ今千八百七十六年ニ婚禮ヲ
 ナセシ者ノ比例ヲ舉シレハ左ノ如シ

州名	ダームスタット	オーラム	ラッヘンハイグ
婚姻局ノ手ヲ經タルモノ	六五、半	五六	五五、四
僧侶ノ手ヲ經タルモノ	三四、半	四四	四四、六

此ノ表ニヨリテ考察ヲ下スモ以上ノ都府ニ於テハ舊教ノ
 婚姻局ニ依ルヲ要セズ信者甚ハダ鮮少ナルモ新教ヲ奉シ
 該局ノ命ヲ仰シモノ夥多ナルヲ見ルニ足ル然レモオーラム
 州ノ如キハ舊教ヲ奉スルノ人民婚ヲ結ブニ當テ尽ク僧徒
 ノ手ヲ經ルハ是レ其ノ祈禱ヲ希望スレバナリ是ニ至リテ
 曼國舊教ノ僧徒モ亦多少困難ノ地位ニ陥レリ然ルニ當時
 新教ノ徒説ヲ立テ、曰ク吾人婚ヲ結ブニ當テ寺院ニ詣リ

牧師ノ祈念ヲ受クルハ是レ果テ何ノ爲ツヤ夫レ婚姻ハ俗
事ニシテ敢テ僧侶ノ關係スヘキ者ニアラス然カルニ新郎
新婦互ニ手ヲ携ヘテ寺院ニ行クハ余等其意ヲ解スル能ハ
ズトブレノスナル者亦曰ク婚姻ハ諸契約ノ如ク俗人ノチ
スベキモノニシテ僧侶ノ與リ知ル所ニアラス故ニ其式場
日耳曼ニ於テ婚姻ノハ敢テ擇ブヲ要セズ唯便利ノ場所ヲ
以テ之ニ充ツヘシ諺ニ云ハズヤ婚姻ハ俗事ナリト僧侶ノ
身ヲ以テ俗事ニ干涉スルハ甚ハダ上帝ノ意ニ背馳セリ宜
シク其國ノ習慣ニ從ヒ都府ノ風俗ニヨラシムベシ然ルニ
此頃僧徒中ニ於テ朝夕二度新婚者ヲ寺院ニ參詣セシメ
ト欲望スル者アリ其甚ハダシキニ至リテハ二三週前ヨリ
寺院ニ詣リ齋戒シテ眞神ヲ祈念シ僧徒ノ祈禱ヲ受ケ而テ

後婚ヲ結フベシト主張スル者アリト雖モ僧侶ノ關係外ニ
干涉スルハ宗教ノ眞意ニ背キ俗人ノ權ヲ蠶食スルモノト
謂ベシ故ニ此ノ如キノ事項ハ君主ノ指揮ニ放任スルハ上
帝ノ大ニ欲スル所ナリ然レモ人民祈禱ヲ熱望シ僧侶ノ媒
介ニ依テ婚ヲ結ハント欲スルモノアレハ之ヲナスモ僧侶
ノ義務ニ非ラスト謂フベカラズ云々流石新教ノ開祖ハ有
名ノ改宗者タルニ違ハズ其說亦人ヲ服スルニ足ル而シテ
云フ所一モ日耳曼ノ國風ヲ破ラズ習慣ヲ害セサルニ至テ
ハ世人ノ稱讚ヲ博スルノ價直アリト云フベシサレド徒ラ
ニ辨ヲ好ンテ喋々噴々スルニアラス只世ノ風潮ニ從ヒ時
ノ輿論ニ左袒セシニ敢テ自ラ進ンテ婚姻ハ宗教ト懸隔
スルモノナリト云フコラス時ノ弊害ヲ恐レテ論ヲ立テ

タルニ外ナラズ其ノ後ナルトザ一ハ簡單ナル祈念法ヲ編成シテ婚姻ノ禮式ヲ定メ名ケテ宗教改革前ノ祈念ト云フ此祈念法ヲ二種ニ區別シ一ハ結婚者ヲ寺院ノ入口ニ拜跪セシメ一ハ院内ニ於テ供養セシムルニ在リ其後改正シテ供養式ヲ廢シ只テ祈念法ノミヲ存セリ是新婚者ヲシテ上帝ノ恩惠ヲ受ケシムルヲメナリ此ノ新教ノ徒婚姻ヲ尊敬スルト雖モ一千七百九十七年ニ當リウイテンバークニ於テ會議ヲ開キ許嫁ヲ稱シテ婚姻トセリ何トナレバ男女許嫁スル際上帝之ニ臨ミ公衆之ヲ目撃スルヲ以テ假令ヒ僧徒ノ祈念耶蘇教ノ習俗ニ從ハザルモ其婚禮タルニ於テハ毫モ効力ヲ減セザレバナリ是ヨリ先キ千五百六十七年ニ於テ教徒復々會議ヲウイデンバーク寺院裁判所ニ開キ

議シテ曰ク近來陋習次第ニ増加シ未タ入興ノ式ヲ行ハサルニ已ニ鴛鴦双棲ノ狀アルハ僧徒ノ干涉シテ禁ス可キヤ或ハ之ヲ罰ス可キヤト云フニ在リ寺院裁判所答テ曰ク是レ寺院ノ罰ス可キモノニアラズ且ツ許嫁ハ正統ノ婚姻ニシテ契約ノ決定セシ以上ハ假令ヒ双棲スル者何ノ不可ガアラソ宜シク之ヲ不問ニ付ス可シト是ニ於テ新教ノ徒メソドナル者又曰ク凡ソ男女互ニ契約ヲ結ビ意氣相投シテ婚ヲナサバ僧徒ノ臨場ハ無要ナリ故ニ僧徒ハ之ニ關ス可カラズ如何トナレバ僧徒之ニ干涉スルハ元來上帝ノ命令ニアラズ唯人間普通ノ慈悲ヨリ發スルモノナレバナリト今其實例ヲ舉ゲテ之ヲ証セシニ千七百年ノ頃ロストツク法庭ニ於テ裁判ヲナシタル判決録ヲ閱スルニルーパーツク

府ノ市民ハノステンマンナル者アリ同シ都府ニ住スルニ
ンゼルト呼ベル一女子ト婚禮ヲ行ヒタルコ憫レムベシ未
タ入興式ヲ施行セサルニ此ノハノステナル者一朝病ヲ以テ
鬼籍ニ登リ爲メニ駕轡ノ契ヲ結ビ偕老ノ佳境ニ入ル能ハ
サルモエンゼル寡婦ノ權理ヲ主張シ夫ノ財產分與ヲ法庭
ニ訴ヘシコ法廷モ亦其權理ヲ承認セリト是ニ由テ之ヲ觀
ルモ婚姻ハ宗教ノ干涉スベカラサルヤ明ナリ此ノ後婚姻
法ニ多少ノ變化アリ男女新婚ヲ企圖スル者ハ必ズ主管者
ノ面前ニ至リ其支配ヲ受ケザルヲ得ザルニ至リテ新教ノ
儀式其効力ヲ減シ世人ノ尊敬スルモノ幾シト跡ヲ絶ツニ
至レリ是ヲ以テ百五十年ノ間婚姻ハ宗教ノ干涉ヲ免レ稍
無事ナルヲ得タリト雖モ今代ニ至リ牧師等大ニ其思想ヲ

變シ正當ノ婚姻ヲ指シテ宗教婚姻ト云ヒ以テ畜妾ノ法ト
區別スルニ至レリ此ノ僧徒等ガ思想ヲ變更スルニ至ル所
以ハ社會ノ文明然ラシムルハラランクハトノ國民會議
ヲ見テモ知ルベシ此ノ國民會議ナルモノハ其議員羅馬舊
教ノ徒多數ヲ占メ常ニ議會ヲ支配シタルモ舊教議員等自
カラ進ンデ曰ク婚姻ハ俗事ニシテ宗教ノ干涉スベキモノ
ニアラサルハ己ニ過去ノ經驗ヲ以テ見ルモ亦明カナリト
自ラ主張スルニ至リシハ實ニ世ノ變遷ヲ觀察スルコ足ル
然レモ婚姻ハ此ノ如ク宗教ノ支配ヲ離レ獨立ノ地位ニ至
リシヨリ其結果如何ノ狀ヲ呈セシヤハ次章ヲ讀ンデ知ル
可シ

第四章 自由選擇婚姻ノ形狀

千八百三十一年ノ始メヨリ離婚ノ舉ヲ企ツルモノ日一日ヨリ多キヲ以テ牧師等大ニ驚愕セリ原來改宗者ノ主トシテ説ク所ハ婚姻ハ俗世界ノ契約ニシテ寺院ノ干涉スベキ者ニアラス唯政府ノ婚姻ヲ許可セザル時ニ當リ配偶者ヲ紹介スルニ在ルノミト主張スルモ離婚ノ日ヲ逐フテ増加スルヲ見此ノ如ク離婚ノ増加スルハ蓋シルイザト雖豫想セザル所ナリ故ニ之ヲ防クノ手段ニ於テ一モ具備スルモノナシ於是僧徒中或ヒハ説ヲナシテ曰ク今日ニアリテハ猶太人ニアラザレバ(盖シム東洋人ヲ)決シテ婚姻ハ自由ニ行フベカラザルナリト又曰ク一旦婚ヲ結ベハ穢リニ離婚スベカラズ若シ離婚ヲ企ツルキハ再婚スベカラズト激論スル者アルニ至レリ然レトモ千八百三十二年ニ至リボメラニヤ

ノ牧師等新婚者ヲ紹介セシモ之ニ應スル者ノナキニ至レリ次ニ一千八百三十三年ニ及ンテ此風遂ニウエストバリアニ波及シ其紹介ヲ辭シ祈念ヲ拒ム者ノ數二十五ノ多キニ及ベリ而テ時ノ政府敢テ之ニ干涉セザリシガ其後千八百四十四年ニ至リ始メテ離婚條例ヲ發シテ濫リニ離婚ヲ企圖セザラシメタリ又千八百五十九年ニ至リプルシヤ政府二個ノ議案ヲ提出シテ婚姻ヲ支配セントセシモ其議案ハ上院ノ廢棄スル所トナリ遂ニ其意ヲ達スルヲ能ハザリシハ遺憾ト謂フ可シ是ヨリ先普魯斯亞政府伯林大會議ヲ開テ新教ノ婚姻條例ヲ改正シ從前ノ婚姻法ニ汚點ヲ加フルカ如キ條件ハ盡ク刪除セントセシニ議會ハ乃チ議決ヲ公布シテ曰ク凡ソ婚姻ノ際牧師ノ紹介ヲ受ケ牧師ノ祈

念ヲ受クルハ今ヨリ之ヲ廢スベシ何トナレハ新婚者新法
 成規ニ從ヒ上帝ノ靈ニ誓言セヨニ尙ホ牧師等カ之ニ干涉
 スルハ人權ノ蠶食ト云ハサルヲ得ヌ云々僧徒等此布告ニ
 不慚ヲ抱キテ曰ク男女婚ヲ結ブハ倫理ノ大道ニシテ人生
 重要ノ事項ナレハ單ニ理論ノ極端ヲ以テ支配スベカラズ
 宜シク人情ニ訴ヘテ支配スベシ彼ノ政府ナルモノ果シテ
 人情ヲ支配スルニ十分ノ勢力ヲ有スル乎是レ決シテ支配
 スル能ハザルナリ然ラハ此人情ヲ支配スルニ足ルモノハ
 只宗教アルノミ去レバ吾人僧徒タルモノ婚姻ニ干涉スル
 ハ單ニ人權ノ蠶食ト云フベカラズ教法ニ從ヒ僧徒タルノ
 本分ヲ盡スノミト各所ニ集合シテ日夜議事ニ務メタリ然
 レハ時ノ普魯斯政府斷乎トシテ動かカス僧徒ヲ諭シテ曰ク

僧徒等其本分(即チ宗教事務)ニ從事シ敢テ婚姻ノ如キ俗事
 ニ關涉スヘカラスト遂ニ僧徒ヲシテ一切其干涉ヲ婚姻事
 務ニ絶タシメタリ
 以上論スルカ如ク日耳曼婚姻ノ事務ハ久シク宗教ノ干涉
 スル所トナリ僧徒ノ願指是レ從フノ有様ナリシカ其後政
 府ノ支配スル所トナリ大ニ婚姻法ノ變化ヲ受ケ婦人ハ其
 地位ヲ高尚ニシ封建時代ノ如キ男尊女卑ノ風殆ンド其形
 跡ヲ絶タントスルニ當リ宗教改革ナルモノ起リ復タ宗教
 ノ關涉スル所トナリ古風再ヒ流行セントスルニ及ビ幸ヒ
 ニ改宗者中ニルイサーナル者アリ其身僧徒タルニ關セス
 婚姻ハ俗事ナリ僧徒ノ關係スベカラサルヲ主張セシヲ以
 テ再ヒ其獨立ヲ挽回セリ實ニ千五百年代ヨリ今日ニ至ル

マデ宗教ト婚姻トノ關係斯ノ如ク錯雜ヲ極メ一モ舊休ヲ
 存スルモノナキニ至ルモ唯指環ノ交換式ニ至リテハ毫モ
 變スルナク其指環ヲ交換スルニ當リ牧師之ニ臨ミテ曰ク
 汝等苟クモ上帝ノ靈面ニ於テ互ニ誓言シタルノ契約ハ耶
 蘇教ヲ奉ズルノ民タルコト耻ヂス汝等宜シク相親睦シテ畢
 生ヲ送ルベシ今指環ヲ交換スルニ臨ミ吾汝等ノ爲ニ上帝
 ニ祈念ス汝等謹ンテ其レ之ヲ忘ル、勿レト是レ古來ヨリ
 行ハル、指環ノ交換式ナリ中世ニ至ルニ及ンデ己ニ婚ヲ
 結ビ指環ヲ交換シタル者ハ一種特別ノ權理利益ヲ享有ス
 ルヲ得タリ故ニハノールフランスイク等ノ諸州ニ於
 テモ假令ヒ己婚者死亡スルモ其遺産ハ動産不動産ニ論ナ
 ク盡ク其子孫ニ傳ヘ政府ノ沒收ヲ免カルモ未婚者ニ指

環ヲ交換セザル者ニ至リテハ此利益ヲ受クルヲ得ス是ヲ
 以テ万一未婚者死スルキハ死者ノ遺産ハ皆政府ノ沒收ス
 ル所トナルハ是レ一種ノ條例ニシテ是非ナキ次第ト謂フ
 ヘシ然レモ僧徒ノ財産ニ至リテハ議論百出之ヲ處置スル
 ニ困難ナリシカバハルニ會議ヲ開キ令ヲ出シテ曰ク執拗
 ノ未婚者ハ其死スル時ハ其遺産ハ尽ク政府へ沒收スベシ
 何トナレバ未娶者ハ倫理ノ大道ヲ卑シニ男女交通ノ情ヲ
 放棄スレバナリハル洲ノ如キハ己婚者ニアラザレバ假令
 ヒ一家ノ族長タリト雖モ都府人タルノ權理ヲ享有スル能
 ハズトフランデンバール洲モ亦タ此法律ヲ採用セシヨリ
 各村戸長役場ノ官吏等壯年ノ未婚者ヲ調査シ若シ其齡己
 ニ廿歳ニ達セバ何人タルヲ問ズ又ハ下僕タルニ關セズ尽

ク之ニ婚姻ヲ執行セシメタリ其後千七百二十三年政府此
ノ法ヲ再閱スルニ當リ年齢ヲ増加シ二十五歳トセリ故ニ
凡ソ日耳曼國民タルモノ齡已ニ二十五歳ニ至ラハ婚姻ヲ
行ハスシテ曼國ニ住スルヲ得ス若シ禁ヲ犯シ二十五歳ニ
至ルモ未タ婚姻ノ禮ヲ行ハザルモノハ直チニ警官ノ手ニ
拘引シ之ヲ説諭スルモ猶ホ肯セザルモノハ之ヲ他國ニ逐
放シテ日耳曼國民タルノ權理ヲ奪ヒ大イニ干涉ヲ婚姻ニ
加ヘタリ故ニ未婚者ノ男女他ノ犯罪ヲ以テ警察ノ拘引ス
ル所トナリ已ニ死刑ノ宣告ヲ受ルルモ幸ニ人アリテ婚ヲ
犯人ニ請求スル者アリテ犯罪者之ヲ承諾セバ其放免自由
ヲ得ルハ最モ容易ナリ斯ノ風習次第ニ蔓延シテ佛蘭西ニ
波及シ歐洲全國殆ソド如此キ干涉婚姻ノ風ヲ取ルニ及ヘ

今其一例ヲ舉ケンニスウイツルヲンド一婦人アリ其
品行頗フル不正數々竊盜罪ヲ犯スヲ以テ終ニ死刑ノ宣告
ヲ受ケタルニ一スウビン人アリテ此ノ女子ニ對シ婚ヲ請
求セシニ女ノ之ヲ受理セシヲ以テ直チニ自由ヲ得タリト
云フ此ノスウビン人ノ祖父嘗テ一婦人車裂ノ刑ニ處セラ
レントスルヲ聞テ之ヲ憫ニ婚姻ヲ請求シテ之ヲ救助セシ
カハ婦人其恩ニ感シスウビン人ノ妻トナルニ及ンテ貞節
ヲ以テ其夫ニ仕ヘ善ク家政ヲ取締リシヲ以テ一家ノ繁榮
トナリ復其近傍ニ比肩スル者ナキニ至レリ是ニ由テ之ヲ
觀レバ日耳曼人ノ腦裡ニ婚姻ハ罪ヲ贖償スルモノナリト
思考セシハ益シ泰鏡ニ照シテ見ルガ如シ然レド千七百年
代ノ終リニ當リマルサスナル者アリ日耳曼政府ガ干涉婚

姻ノ法ヲ設ケ大ニ結婚ノ獎勵ヲナシ男子二十歳ニ至ラバ
 其財産ノ有無ニ關セズ妻ヲ娶ラシメ女子ハ十八歳ニ至ラ
 バ必ズ婚ヲ結ハシム其甚ハダシキニ至テハ婦女國法ヲ犯
 シ己ニ死罪ノ宣告ヲ受ケタルモ婚姻ヲ諾スルキハ直ニ之
 ヲ放免セシムルニ至レバ其ノ極人口ノ蕃殖ニ増加ヲ來シ
 之ヲ昔日ニ比セバ殆ント倍蓰スルヲ見テ大ニ驚キ天ノ未
 タ陰雨セザルニ及ンデ之ガ備ヲ爲サント甚ハダカヲ豫防
 法ニ盡セリ其方法ニ至リテハ素ヨリ一ニシテ足ラズト雖
 最モ良策トスル者ハ婚姻ニ制限法ヲ設ケ猥リニ婚ヲ許
 サズ然レモ一家數口ノ生計ヲ維持スルニ足ルモノハ婚ヲ
 許スモ可ナリト云フコアリ此說一タビ世ニ出ルヤ新聞ニ
 演說ニ世上ノ論客靡然トシ之ニ傾キ日夜婚姻法ヲ論スル

モノ絶ルナシ是ニ於テ日耳曼政府大ニ覺悟スル所アリ始
 メテ人口ノ増加ニ驚愕シ之レヲ抑遏セント務メ是レ獨リ
 曼國中央政府ノミナラズ山間溪谷ノ一小國タルバーバリ
 アノ如キモ人口ノ増殖ヲ苦慮シテ之ヲ制セント力メタリ
 是ニ於テ婚姻制限法ヲ案出シ一家ノ生計ヲ維持スルニ堪
 エルモノニアラザレバ結婚スルヲ得ザラシム故ニ新ニ婚
 ヲ結ハント欲スル者ハ先ツ婚姻局ニ至リ己レガ資産ヲ明
 示シ假令子女ヲ産スルモ生計ニ窮シ政府ノ保護ヲ煩ハス
 如キハ萬之レナキヲ證セサルベカラサルニ至レリ此ノ新
 法ノ効力果ノ如何ナリシカヲ示サン爲メ余ハ千八百七十
 年代ニ當リ曼國僧徒ノ佛京パリニスニアルモノ本國ニ送リ
 タルノ郵書ヲ舉ケン

拜啓近頃當佛國ハリスニハ街道ノ掃除人日増ニ加リ
 シヲ以テ其賃金大ニ低落ヲ來セリ而テ能ク之レカ探
 求ヲ遂ケタルニ是レ皆日耳曼人ニシテ重ニダームス
 ヲツトヨリ來リ其數殆ソド一萬人ニ越ユ今其來意ヲ
 問フニ各自其本國婚姻制限ノ法ヲ避ケンガ爲ナリト
 云々

先ニハ干涉婚姻法ヲ避ケンガ爲メ他國ニ遁レ今復々制限
 法ヲ免レント欲シテ他國ニ行キ私生ノ子女ヲ産出スルモ
 亦敢テ怪ムムコ足ラサルナリ是ニ由テ之ヲ觀ルモ曼國ハ
 昔ヨリ壓制ノ風習大ニ流行セシ國ニシテ今日ニ至ルモ干
 涉教育行ハレ加フルニ主相ピスマーシク公壓制ヲ以テ人民
 ヲ兵役ニ就カシム其年々歳々多數ノ人民住ニ馴レシ故國

ヲ跡ニ見テ未ダ見ザルノ亞米利加ニ移住スルモ亦宜ナリ
 ト謂フベシ

以上論スルカ如ク政府制限法ヲ設ケテ婚姻ヲ禁セシト雖
 且共一旦増加シタルノ人口ハ容易ニ減少ヲ見ル能ハス故
 ニハイパリア州ハ未ダ其結果ヲ見ルニ至ラズノヘルリン
 ノ如キ繁盛ノ都會ト少シモ異ルヲナカリシニ今日ニ至リ
 テハ稍其効力ヲ顯ハシ年々逐フテ次第ニ減少スルヲ見ル
 埃斯利亞及ヒタイロルニ於テモ亦此ノ婚姻制限法ヲ設ケ
 八民ヲ一縣之ヲ守ラシメタリ故ニ男子婚ヲ結ハント欲
 スル者ハ一定ノ歳入アリテ一家ノ生計ヲ維持スルニ足ラ
 ザレバ婚姻スルヲ得ズカレバ彼ノ樵夫ノ如キ一定ノ歳入
 ナキモノハ畢生偕老ノ情味ヲ嘗ムルヲ得ス是ニ於テ樵夫

ハ畢生妻ヲ娶ルヲ得ス何トナレハ樵夫ノ勞働ハ夏期ニア
 ラズ偶々夏其職ヲ得ルアルモ是偶然ノ事ニノ算ニ入ルハ
 得ズ故ニ其賃金ヲ得ベキノ時ハ寒中ナリ一定ノ歲入ト
 テハアラザルナリ此等ノ種族ハ遂ニ妻ヲ娶ルベカラサル
 乎人倫ノ大道ヲ破ルヲ如何セン人倫ノ大道ヲ守ラン乎國
 法ヲ破ルヲ如何セン是レ實ニ至難ノ法ニシテ其永續スベ
 カラザルハ論ヲ待タザルモ一旦如此キ法令ヲ發布セシヨ
 リ人民ノ風習次第ニ紊亂シ道德ヲ守リ其身ヲ方正ニスル
 モノ地ヲ拂フニ至レリ次ニメツクレンベルグ洲モ亦マル
 サス法ヲ採リテ婚姻ヲ制限セシニヨリ人口大ニ減少シ勞
 働者ノ賃金非常ニ騰貴セリト斯ク日耳曼聯邦皆マルサス
 ノ制限法ヲ採用シ婚禮ヲ制セシト雖モ獨リプルシヤハ然

ラス益婚禮ヲ獎勵シタルニ幾ハクモナクシテ聯邦中ノ北
 方ニ位スル各國此ノ先例ニ倣ヒ大ニ獎勵ノ法ヲ行ヒタル
 日耳曼ノ南方ノ諸國ハ却テ制限法ヲ採リシヲ以テ其ノ
 全國ニ對スルノ結果ニ至テハ互ニ平均スルニ至レリ
 以上ノ如キ有様ニテ今代ニ至リシモ一千八百七十五年二
 月六日ヲ以テ婚姻法ヲ改革シ男子ハ廿歲女子ハ十六歲ニ
 シテ婚嫁スベシトノ法律ヲ出セリ然レモ男女若シ父母ノ
 許可ヲ得ルコアラザレバ男子ハ廿五歲女子ハ廿四歲ニ至
 ルマテ婚嫁スルヲ得ズト是日耳曼全國ノ法律ニシテ中央
 政府ノ定ムル所ナレバ聯邦諸國ハ皆之ニ從ハサルヲ得ザ
 ルモ單ニ父母ノ許可ヲ得ズシテ婚スルニ至リテハ強ク無
 効ノ結婚ト稱スルヲ得ザルベシ如何トナレバ未タ國法ニ

於テ明示スル所ナケレバ聯邦諸國ハ其風俗ニ從テ一様ナ
 ラズハノトハルカレベツヌナツソトハンボルク及ヒサキ
 シコトキムスゴサルデンハイグパーワリア等ノ諸洲兩
 親ノ許可ヲ得ズシテ婚スルモ無効トセズ只ダアンスバリ
 バリエーズケンブテンソルムス并ニカイブピユレンノ如
 キハ之ニ反シ兩親ノ許可ヲ得ザルノ婚姻ハ全ク無効トセ
 リ其後千八百七十五年ニ於テ發シタルノ法律ニヨレバ武
 官或ハ政府ノ官吏タルモノハ特別ノ事情アルニ非レバ二
 十歳以下ヲ以テ婚ヲ結ブテ得ズト雖モ中古ノ如キ種々ノ
 細則ハ全ク廢棄セラレタリ
 斯ク日耳曼聯邦ニ於テ婚姻條例ヲ定メタレバ人口ノ増殖
 ハ蓋シ數ノ免ルベカラザル所ナルニ其實際ニ至テハ大ニ

之ニ反シ日ヲ逐ヒ月ヲ逐フテ減少シ柏林府内ノミニテモ
 僅々一年間ニ二千四百三十五人ノ減少ヲ見ルニ至レリ今
 千八百七十二年及ヒ千八百七十六年ノ婚姻數及ビ人口ノ
 比較表ヲ擧グルニ左ノ如シ

年 代	婚 姻 數	人 口 數
一千八百七十二年	四二三九〇〇	四二七五二五五
一千八百七十六年	三六六九一二	四一〇五八七八〇

右ノ表ニヨリテ考フレバ僅々年間ノ歲月ニシテ百六十九
 万三千七百七十五人ノ減少ヲ發見スベシ此ノ減少ノ原因
 素ヨリ一ニシテ足ラズ商業振ハズ工業起ラザル如キ間接
 ニカヲ助ケント雖モ其最モ近因ナルハ國民軍ノ法ヲ設ケ
 日耳曼國ノ男子タル者ハ必ズ定期ノ服役ヲ免ルベカラザ

ルニ胎胎セシハ明白ナリ現ニ今日日耳曼ノ男子ハ年二十
 歳ヨリ三年ノ間兵役ニ服シ其後四年ノ豫備軍ニ編入セラ
 ル故ニ曼國ノ男子ハ二十七歳ニ至ラザレハ全ク兵役ノ義
 務ヲ免ル、能ハズ何トナレバ定期ノ服役三年ナリト雖モ
 其後四年ノ間徴集點呼ノ法アリ一年ノ中二ヶ月ハ復タ兵
 役ヲ免ル、ヲ得ザレハナリ是レ恰モ右手ヲ以テ物ヲ與ヘ
 左手ヲ以テ之ヲ奪フガ如シ實ニ當時日耳曼ハ一方ニハ結
 婚ヲ奨勵シ一方ニハ軍役ニ服セシム其人口ノ非常ニ減少
 スルモ亦宜ナラヌヤ故ニ日耳曼人ハ其最モ勞働ニ堪ユベ
 キ際ハ政府ノ使役ニ應ゼザルヲ得ザレハ一家ノ主人公ト
 ナリ夫妻共ニ生活スルハ四十歳以後ニアラサレバ爲スベ
 カラザルナリ斯ノ如ク全國皆兵役ニ服スルノ制ハ其始ノ

テルサスノ企圖ニ出テ其害ノ波及スル所人民ノミニ止ラ
 ズ延ヒテ帝國ノ安寧幸福ニモ影響スル蓋シ鮮少セラザル
 ベシ故ニ一國ノ法令ヲ制作スルモノ宜シク鑑ミザルベク
 ナリ

第五章 結 論

今ヤ日耳曼婚姻論ノ局ヲ結ハントスルニ當リ一言セザル
 ベカラズ即チ日耳曼ノ婚姻ハ宗教ノ關セザルヲ以テ世ノ
 道徳上ニ及ンタルノ結果ハ果シテ如何ナルカノ一點ニア
 リ前章已ニ論スルガ如ク大古ヨリ今日ニ至ルマテ婚姻ハ
 人民ノ契約ニシテ敢テ宗教ノ關スベカラサルハ尙一牛ノ
 賣買ニ於ルカ如シ決シテ僧徒ノ啄チ其間ニ容ルベカラサ
 ル者ト思考セシニ近頃世ノ道徳大ニ衰替セシヲ見テ稍々

前説ヲ變シタルノ觀アリ此ノ説獨リ日耳曼人ノミニ限ラズ羅馬人モ亦此ノ思想ヲ懷キ婚姻ノ契約ハ上帝ノ降鑑スル所神靈ニシテ犯スベカラズト信認スルノ証跡ハ往々其國史上ニ散見ス中世ニ至リ僧徒道德ノ衰微ヲ嘆息シカチ婚姻法ノ改良ニ盡セシモ惜ムベシ無智ノ人民僧徒ノ干涉ヲ怒リ之ニ抗抵シテ遂ニ僧徒ノ意ヲ水泡ニ歸セシメタリ是ヲ以テ今日佛王ベゼン法典ヲ案シカロピンチアノノ法律ヲ見ルニ宗教ノ婚姻ニ必要ナルノ條件ハ絶テ見ルナシ偶千四十三年ノ頃佛王ヘンリー三世婚ヲ結フニ當テ僧徒其式場ニ臨ミシヲアレヒ是ハ客人タリ證據人タルノ資格ヲ以テ臨場スルニ止リ敢テ僧徒ノ資格ヲ以テ君王ノ婚儀ニ干涉シタルコアラサルナリ然ルニ千二百年代ニ至テ

ハ僧徒大ニ爪牙ヲ延バシテ婚儀ニ干涉シ僧徒ノ手ニ頼リテ婚ヲ舉行シタルコ非レハ無効ノ婚姻ナリト布告スルコ及ビシカ未ダ嘗テ婚姻法ヲ設ケサリシニ千三百年代ニ至テ始テ規則ヲ設ケ人民ヲ一般ニ之ヲ守ラシメリ此ノ婚姻ト宗教ノ間紛雜ヲ極メ宗教ハ婚儀ニ干涉スベキモノナリ俗人ノ婚姻ヲ舉グルモノハ有効トナスベカラズト極論スルモ俗人ハ反對説ヲ主張シ議論百出愈出テ、愈々々々ルノ時ニ當テ宗教改革世ニ興リ改宗ノ巨魁ル―ザ―等此ノ有様ヲ見テ嘆シテ曰ク婚姻ハ素ト俗事宗教ノ關スベキモノニアラズ然ルニ之ニ關係シテ我意ヲ振ハ、却テ宗教ノ効力ヲ減シ猶ホ毛ヲ吹テ疵ヲ求ムルコ異ナラザルナリ故ニ宗教ハ決シテ干涉スベカラザルナリト主張シ宗教ノ

干涉ヲ駁論セシヨリ婚姻ハ僅ニ其地位ヲ保テ宗教ノ干涉
 免レタリ然レモ僧徒ノ手ヲ經ズシテ婚ヲナセシ者ハ是
 レ無効ノ婚儀ニシテ正統ノ婚姻ニアラサルナリトノ説ハ
 未タ嘗テ其根ヲ絶ツニ至ラザルナリ
 右ノ如クローザーハ其説ヲ主張シタレバ假令ヒ非難スベ
 キノ條件少カラサルモ騎虎ノ勢復タ前説ヲ變スベカラザ
 ルハ勢ノ然ラベムル所ナリ然レモローザト獨リ立テ曼國
 二百年來宗教ノ干涉ヲ解キ羅馬法ヲ輸入セシヨリパツハ
 ンドルフノ條約ニ至ルマテ婚姻ノ儀式ヲ宗教ノ干涉ヲ
 免レシメタルハ其力大ニシテ亦豪傑ノ士ト云ハザルベカ
 ラザルナリ
 此ノ時ニ當リ舊教ノ徒ハ獨リ羅馬ニ於テ其威力ヲ逞シ婚

姻ハ凡テ其干涉スル所トナリシモローザーノ輩世ニ出テ
 新教ヲ唱フルノミナラズ婚姻ハ宗教ノ關係スベカラザル
 ノ理ヲ喋々辨論セシヲ以テ大ニ影響ヲ受ケ復タ昔時ノ如
 シ其威權ヲ振フ能ハズト雖モ其未タ權勢ノ地ニ墜チザル
 或地方ニ於テハ尙ホ干涉主義ヲ以テ勢力ヲ專ラニセリ然
 レモ新陳代謝ハ今日文明ノ主義ニシテ舊物去テ新物來ル
 ハ尙四季ノ順環スルカ如シ故ニローザーノ改革説ヲ唱ヘ
 シヨリ僧徒ヲシテ宗教ノ手ヲ婚姻ノ干涉ニ絶タシメント
 盡カスルモノアリト雖モ宗教全ク手ヲ收ムルキハ其ノ弊
 害甚クシキヲ以テ新教モ亦干涉ヲ始ムルニ至レリ況ンヤ
 羅馬ノ法律ヲ採用セシニ及フマデハ其干涉未タ甚クシカ
 ラザルニ其急劇ナル變動ヲ舊教ニ及ホシタルハ果シテ何

ノ理由アリテ然ルヤ然レト利害得失ノ相伴フハ事物ノ通
理ニシテ新教モ亦其説ノ變シテ干涉主義ニ化スルモ此ノ
理ニ外ナラサルヲ以テ其結果次第ニ道德ニ及ボシ道德日
ニ腐敗シテ私生ノ出産甚ハ多ク日耳曼國中新教ヲ奉ス
ルノ土地ハ不正出産ノ數舊教ノ地方ニ超過スルノ夥シキ
ハ統計表ヲ見ルモ明ナリ今之ヲ左ニ記載シテ讀者諸君ノ
一覽ニ供ス

新教ヲ奉スルノ州ト舊教ヲ奉スルノ州ト不正ノ出産
比較

新教ヲ奉ズルノ諸州

ブルンツ州

不正ノ出産百人ニ付テノ割合

九

ブランデンバーク州

一〇、九

ボメラニア州

一〇、

スウエデンウイグホルステン州

九、六

舊教ヲ奉スルノ諸州

不正ノ出産百人ニ付テノ割合

ウエストハリア州

二、七

ラインランド州

三、〇

又都府ニシテ新教ヲ奉ズルモノト舊教ヲ奉ズルモノ
ト不正ノ出産比例

新教ヲ奉ズルノ都府

不正ノ出産百人ノ割合

ベルリン府

一三、五

マクテバーク府

九、六

ハイナル府

八、九

コブレンツ府

二、七

舊教ヲ奉ズルノ都府

ニネキネヲ府

三、三

ツレビス府

三、三

又ニヤンゼリカル教ヲ奉スルノ都府

不正ノ出産百人ノ割合

アルネンバーク府

一四、五

セリシガ府

一三、〇

コバーク府

一三、八

ヒルドバルグホーセン府

一〇、八

ウエイマル府

八、八

上表ノ顯ス如ク新教舊教其道德ノ相懸隔スルハ其原因舊教ノ道徳新教ヨリモ高尚ナルノ故ニアラズ又舊教ノ人民ハ其風俗習慣必スシモ新教ノ人民ヨリモ善良ナルニアラ

ズ只新教ハ社會ノ變化ヲ知ラズ世ト共ニ浮沈セズ一ツニ日耳曼法ヲ主張シテ之ニ固着セシニアリ宜ナルカナ其道徳ニ害ヲ及ヌヤ是ニ由テ之ヲ觀レバ婚姻ニシテ宗教ノ干渉ヲ免レ僧徒ノ手ヲ經ズ俗人ノ手ヲ以テ自由ニ婚ヲ結ブヲ得バ復自由ニ離縁スルニ至ルモ耻辱トモザルハ自然ノ勢ニシテ禁ズ可カラズ而シテ日耳曼ニ於テ其流風一時大ニ行ハレ婚姻ヲナスヤ否離縁ヲナス者屢ナリ然レモ婚姻ト離縁ノ比例意表ニ出テザルハ幸ト謂フベシ今一千八百七十一年十二月一日ノ調査ニヨルニ日耳曼全國ノ人口中離縁ノ實數ハ僅々六万九千七百九十四人ナリ今各州十五歳以上ノ男子一万人ノ中ヨリ離縁ヲナセン數ヲ舉ゲンニ左ノ如シ

州名	離縁數
プルシヤ	三〇
サキソニー	三七
ワイデンバルク	三二
ハハリヤ	一一
一ベータン	一二
總數	一四二

右ノ如ク離縁ノ數非常ニ多カラズト雖モ其離縁ヲナス者ハ都府人コシテ皆上等社會ニ多シ農夫ノ如キハ未タ嘗テ離縁ヲ法庭ニ訴フル者ナシ此ノ離縁ノ數非常ニ少キハ其數實ニ少キコアラズ是實際離縁シタル者ト雖モ之ヲ届ケザルニヨルノミ大抵離縁者ノ三分ノ二ハ再婚スルヲ通例

トス故ニプルシヤノ離縁者平均三十人ナリト雖モ其實三十八ニアラスシテ九十人タルト明カナリ彼ノトランシルハニヤニ於テ新敎ヲ奉ズル貴女中三分ノ二ハ離縁セザル者ナキヲ以テ通常ノ婦人ハ三人ノ新郎ヲ變ヘタリト且ツボチル氏曰クサキソノ農夫ノ中一夫一婦ハ其喜怒哀樂ニ從テ離縁スルノ風ナレバ其離縁ヲナスハ實ニ容易ノ事ナリ是ヲ以テ日トシテ離縁ノ起ラザルナク月トシテ離縁ノアラザルナク遂ニサキソノ農夫ヲ有名ナラシムルニ至レリ是ニ由テ之ヲ考ソルモ離縁ノ少ナカラザルヲ証スルニ足ル實ニサキソノ人ハ離縁ヲ以テ耻辱トセズ却テ婚姻ハ一時ノ契約ナリ之ヲ破ルモ決シテ意ニ介セサルノ風ナレバ偕老同穴ノ情味ハ毫モ望ムヘカラズコナコル府近傍

ノ村落ニ於テ一年間ニ婚姻ノ數十六アリシモ未ダ六ヶ月
ヲ經ザルニ其離婚セザルモノ僅カ六人ナリ現ニ余カ住所
ノ近傍ニ二週間ニシテ婚姻ノ數十一個ニ至リ是亦一年
ヲ經ザルニ尽ク離婚セシテ見ル且ツ僧徒等余ニ告テ曰ク
此頃離婚ヲ企圖スルモノ續々世ニ輩出シ社會ノ道德ヲ害
シ風俗ヲ惑亂スル決シテ鮮少ニアラス是レ宜シム一法ヲ
設ケテ禁遏スベシト主張スルヲ見ルモ其離婚容易ニシテ
未ダ入興ノ式ヲ行ハサルニ細事ノ口實ヲ以テ離婚セント
スルモノアルニ至ル豈恐レザルベケンヤ今著名ノ一例ヲ
舉ケテ之ヲ示サンニ日耳曼ノ都府ベルリンニ富農ノ一紳
士アリ齡ヒ巳ニ四旬ニシテ一男二女アリ其女ノ容姿ハ一
顧殆ント國ヲ傾ムタルノ風致アリ而シテ其芳紀ハ正ニ破爪

春ヲ迎フルヲ以テ縉士其女ニ語テ曰ク汝ヲ婚テ新郎ニ結
ヘハ須ラク其夫ヲ愛スベシ若シ之ヲ愛スル能ハサレハ吾
レ又汝ノ爲ニ婚ヲ絶テ更ニ汝カ意中ノ人ヲ求ムヘシ如此
ク未ダ嫁セサルノ前父已ニ離縁ヲ以テ其子女ニ教ユ其風
俗ノ亂レ道德ノ衰フルモ亦宜ナリ是ヲ以テサキソン僧徒
等此ノ弊害ヲ非難シ其源因ヲ求メテ之ヲ治メント盡力シ
タリ吾嘗テサキソン人ノ言ヲ聞クニ曰ク余ガサキソン妻
親父ノ家ニ歸リタルニ偶慈母リシヲ洗フヲ見ル已ニ
シテ慈母洗濯ヲ終ヘ之ヲ日光ニ乾サントモシニ余カ妻之
ヲ取リテ洗濯セリ其慈母コ對シ不敬云フベカラサルナリ
故ニ余ハ此ノ如キ婦人ト共ニ室ヲ同フシ居ヲ共ニスル能
ハザルナリトサキソン人ノ離縁スルモノ率子如此シ其道

徳ノ衰微ヲ來タシテ徳義ニ心ヲ傾ムル者ナキニ至ルハ豈ニ驚クコ足ランヤ今數ヶ國離縁ノ數ヲ擧ケテ以テ道德ノ衰微ヲ證セン

年齢十五歳以上一万人ノ人口中離縁者

日耳曼

二六

デンマーク

五〇

ハンガリー

四四

スウイツルランド

四七

オストリア(カヅリツキ宗)

四八

ハンバルグ

七〇

純粹ノカヅリツキ宗ヲ奉ズル都ノ離縁者

ツレビス

七

コロチ

九

マンスタ

九

此ノ表ニ依ル時ハ新教ヲ奉ズルノ民ハ道德ヲ重ンセズ舊教ヲ奉ズルノ人民ハ徳義ヲ尊重スルハ一目瞭然敢テ疑テ其間ニ容ル、ニ足ラズ且ツ日耳曼政府一千八百七十二年ニ當リ出版シタル統計局ノ報告ヲ見ルニ離縁ノ割合ハ人民ノ奉ズル宗教ノ變化ニ依テ大ニ其差違アルハ是レ確平タル事實ナリ之ヲ實際ニ徴スルニイハンゼリカル宗ヲ奉ズルノ州ニ在テハ離縁スルモノ屢ナリシニ舊教ノ諸州ニ於テハ離縁ノ數至テ小數ナルカ如シト又ヌスイタルラノドノ新教ノ諸州ニアリテハ離縁スル者殆ンドサキソノ人ト異ナラズ以テ道德衰替ノ一斑ヲ窺フニ足ル余カ友ホ

一トニ住ズル者余ニ語テ曰ク此地方ニ四人ノ紳士アリ今日各自妻トスル所ノ婦ハ皆其前相互ノ妻ナリ而シテ宴會ヲ開クニ當テハ少シモ友義ヲ害セズ親睦ヲ破ラズ恰モ竹馬ノ友タルノ觀アリト然ラハ則チ日耳曼南部ノ諸國ト雖モ遠ク及ハザル所ナリ

日耳曼ハ前論ノ如ク道德日ニ月ニ衰微シ德義殆ンド地ヲ拂フニ至リシヲ以テ今ニシテ早ク之レガ救治ノ策ヲ講ゼザレハ婚姻ハ宗教ノ干涉ヲ免レ道德衰微ノ極途ニ救フベカラザルノ慘狀ニ陷ラシ夫レ情慾ヲ恣ニシ誘導ヲ專ニシ而シテ婚姻ヲ尊敬セズ唯一俗事ノ契約視セバ假令ヒ婚ヲ結ブモ長ク鴛鴦ノ契ヲ重ヌル能ハズ一朝美人ヲ見レバ情慾ハ忽チ動ヒテ之レガ誘導スル所トナリ糟糠ノ妻ヲ捨テ、

新婦ヲ娶ルノ易キ恰モ掌ヲ反スガ如キニ至ルハ必然ナリ然ラバ則チ之ヲ如何セバ可ナルカ嚴律ヲ設ケ人ヲ之ニ從ハシメハ社會ヲ利シ道德ニ益アラント唱フル者アリト雖モ是レ却テ社會ヲ害シ道德ヲ破ルモノト謂ハザルヲ得ズ然レモ元來小兒ヲ保護スルニハ非常ノ注意ヲ要シ之ヲ養育スルニハ道德ヲ以テセザルベカラザルハ天理ノ許ス處宗教ノ主張スル處ナリ是ニ於テカ離縁法ヲ設ケ猥リニ離縁セザラシメバ小兒ヲ保護シ又チ家ヲ維持スルノ刺衝物トナランコトハ明カナリ由シ小兒ヲ保護スルノ刺衝ナラザルモ社會ノ習慣ヲ釐正シ秩序ヲ有チ道德ヲ振興セシムルニハ十分有力ナルハ敢テ疑フヘカラザルナリ凡ソ一國ノ基礎柱石トスル所ハ一個一民ニアラズシテ一家族

ニアリ一國ノカトシテ頼ム所ハ其國ノ海陸軍ニアラズ
 テ家族ニアリ故ニ一國ノ政府タルモノハ須ク家族ノ増
 加ヲ勉メ之ヲ獎勵セザルベカラズ此ニ由テ之ヲ觀レバ婚
 姻日ヲ逐フテ減少シ離縁月ヲ増テ増加スルモ人之ヲ耻
 ナトセサルノ國民ニ至リテハ其國大ニ文明ニ進ミ民豊ニ
 兵強ク今後各國ヲ併吞シテ天下ニ一大帝國ヲラシムハ到底
 望ムベカラザルナリ



日耳曼國 紳士 嬖嬖 婚姻事情終

明治二十一年六月六日印刷
 同 六月九日出版

(定價金貳拾錢)

譯者 東京府平民 加本隆太郎
東京府下芝區白金臺町
 壹丁目四十八番地

發行人 愛媛縣平民 綾井武夫
東京府下京橋區三拾間堀
 壹丁目六番地

發行所 文祥堂
東京府下京橋區三拾間堀
 壹丁目六番地

印刷人 堀口昇
東京府下京橋區尾張町
 新地十八番地活版所

版權所有

一國ノカトシテ頼ム所ハ其國ノ海陸軍ニアラズレ
 家族ニアリ故ニ一國ノ政府タルモノハ須ク家族ノ増
 加ヲ勉メ之ヲ獎勵セザルニカラス此ニ由テ之ヲ觀レハ婚
 姻日ヲ逐フテ減少シ離縁月ヲ進フテ増加スルモノ之ヲ耻
 ナリセザルノ國民ニ至リテハ其國大ニ文明ニ進ミ民豊ニ
 兵強ク今後各國ヲ併吞シテ天下ニ一大帝國ヲランハ到底
 望ムベカラザルナリ



日耳曼國 婚姻事情終
 紳士氏編

明治二十一年六月六日印刷
 同 六月九日出版

(定價金貳拾錢)

譯者 東京府平民 加本隆太郎

東京府下芝區白金臺町
 壹丁目四十八番地

發行人 愛媛縣平民 綾井武夫

東京府下京橋區三拾間堀
 壹丁目六番地

發行所 文祥堂

東京府下京橋區尾張町
 新地十八番地活版所

印刷人 堀口昇

版權所有

東京日本橋區通り三丁目

丸善書店

同 京橋區銀座四丁目

博聞社

同 神田區小川町通り

集成社

同 日本橋區久松町

博文堂

同 同 通り壹丁目

大倉書店

同 京橋區銀座貳丁目

中近堂

大坂本町四丁目

岡島眞七

同 備後町四丁目

博聞分社

京都河原町通り

大黒屋書舗

大

賣

捌

